

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370116

研究課題名(和文)環境美学における哲学的自然美論の現代的射程

研究課題名(英文)Contemporary range of the natural beauty theory of philosophy in environmental aesthetics

研究代表者

平山 敬二(Hirayama, Keiji)

東京工芸大学・芸術学部・教授

研究者番号：50189867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：真・善・美を分立的に捉える近代的知のあり方は、人類に大きな進歩と発展をもたらしたが、その反面、近代文明は自然との調和を喪失し、大きな危機に直面している。その危機を克服するために、われわれは今一度、自然の非道具的・精神的な価値について再認識する必要がある。自然と人間との関係の再構築こそは、現代文明に突き付けられた根本的課題であり、この課題を果たすために何よりも基本となるべきものは自然に対する美的・精神的感受性の回復とその哲学的正当化である。本研究課題遂行において、われわれは美学的研究と倫理学的研究の両面からこの問題に取り組み、哲学的自然美論の現代的意義について、その一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The separation of truth, goodness and beauty in modern knowledge brought great progress and development to mankind, but on the other hand, the modern civilization loses harmony with nature and is facing a major crisis. In order to overcome the crisis, we need to recognize the non-instrumental and spiritual value of nature again. Reconstruction the relationship between human being and nature is the fundamental issue confronting modern civilization and to fulfill this challenge the most basic thing is the restoration of aesthetic and spiritual sensibility for nature and its philosophical justification. In carrying out this study challenges we tackle this issue from both sides of the aesthetic and ethical research and clarified the part about the significance of philosophical theory of natural beauty.

研究分野：美学

キーワード：自然美学 自然美論 環境美学 マルティン・ゼール ゲルノート・ベーメ シラー 環境倫理 ドイツ哲学

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日の東日本大震災を契機に、自然と人間との関係を巡る議論が以前をはるかに超える真剣さにおいて多方面で活発に行われるようになった。しかしそれらの議論はややもすると情緒的あるいは単に技術論的なものにとどまり、国家乃至社会としての根本的な方向性を定めるための哲学的考察に欠けていると思われた。近年において環境美学に関する哲学的基礎付けについては日本でも徐々に研究が進みつつあるが、環境先進国と言われるドイツにおける哲学的環境美学研究に関しては、以前からその重要性が指摘されているにも拘らず、その難解さの故か、かなり立ち遅れているという現状があった。現代芸術におけるランドアートやパブリックアートの展開と呼応して、美学の分野においても環境美学への視点が徐々に成立していき、近年では英米系の分析美学の伝統を踏まえたアレン・カールソンやアーノルド・パーリアントなどの研究が注目を集めている一方、ドイツ系の環境美学においては、ゲルノート・ベームやマルティン・ゼールの自然美学が研究の課題対象として注目されていた。ドイツの哲学的伝統を踏まえた現代ドイツにおける自然美論研究は、日本における環境美学の基礎付けのためにも極めて重要であると思われた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ヨーロッパにおける環境思想、とりわけドイツの伝統的哲学的考察を踏まえつつ現代ドイツにおける哲学的自然美論の研究に焦点を当てるとともに、日本における伝統的な自然観との対比のもとに、日本における哲学的環境美学の確立に一石を投ずることである。そのための各論として、以下のような具体的な研究目的が立てられた。第一には、現代ドイツ哲学における自然美学研究を環境美学の観点から徹底して推し進める

ことである。具体的には現代ドイツにおける自然美学研究の代表者とみなされるG.ベームとM.ゼールの環境美学思想についての集中的な解明を目指すこと。第二にはドイツにおける従来の伝統的自然美論と現代における自然美論とを対比的に研究し、両者の相違点を明らかにすること。第三にはドイツの伝統的及び現代的な自然美論の有効性を、日本の自然観との対比的研究によって検証すること。第四には倫理学研究者と美学研究者との共同研究を通して、従来の環境美学や環境倫理学の枠組みを超える新たな環境美学の構築の可能性を探究すること。第五にはドイツ人研究者と日本人研究者との環境美学及び自然美学を巡る共同研究により、東洋と西洋との風土の相違がどのように自然美学研究に影響するのかについて検証すること。以上が本研究の各各論を含めた研究目的であった。

3. 研究の方法

本研究は、ドイツ系環境美学における自然美論の現代的意義を究明することにその主眼があるが、その研究目的を効果的に遂行するために基本的に二重の研究体制がとられた。第一には美学芸術学的研究者と哲学倫理学的研究者との相互的な共同研究により研究を遂行すること。これにより従来の美学的枠組みを超えた新たな哲学的環境美学研究への展望を開くことが目指された。第二にはドイツ人研究者との直接的な研究協力体制のもとに日本人研究者の研究を推し進めること。これにより単なる文献研究にとどまらない動的な研究体制の確立を計画した。第一については、美学芸術学研究者と哲学倫理学研究者の合計6名(内1名は連携研究者、2名は研究協力者)によって構成された。第二については、現代ドイツにおける哲学的環境美学の代表的研究者であるゲルノート・ベーム(ダルムシュタット工科大学)とマルティン・ゼール(フランクフルト大学)及びヴォ

ルフハルト・ヘンクマン（ミュンヘン大学）の3名のドイツ人研究者との直接の研究協力体制を確立することが当初計画として計画された。本研究期間は3年間で予定し、その年次計画は第1年次の基礎的研究期間、第2年次の発展的研究期間、第3年次の総合的研究期間に分けられた。

4. 研究成果

本研究は、各年度ほぼ当初の研究計画通りに遂行され、所定の研究目的に応じた成果を収めることができた。具体的な各年度の主な研究実績並びに成果は以下のものである。第1年度においては、当初の計画に従い、夏季及び冬季にそれぞれ2日間にわたる計2回の合同研究会を開催した。特に第2回目の合同研究会では、フランクフルト大学のマルティン・ゼール教授を海外研究協力者として招聘し、同教授の二つの講演を中心に「自然美学を巡る公開コロキウム」を開催することができた。またゼール教授の招聘と合わせて、同年末には、法政大学出版局からゼール教授の著書（『自然美学』約500頁）の翻訳出版を当科研究課題研究メンバーの総力を集めて実現することができた。この翻訳出版は、今後の日本における自然美学研究の深化のために大いに資するものであることを確信する。さらに同年12月の日本ヘーゲル学会大会においては、当課題研究メンバーの平山、加藤、小川の3名によって「自然美の哲学 自然美学の哲学的批判から環境美学の構築へ」と題したシンポジウムを企画開催するに至った。第2年度においても、当初の計画に従い、夏と冬の計2回にわたり、それぞれ2日間の合同研究会を開催し、各研究メンバーによる計8個の研究発表が順次行われた。この研究発表のなかには、和辻哲郎の「風土」論を巡るものもあり、それは今後の日本の自然観とドイツの自然観との対比的な研究への基礎付けにかかわるものでもあった。また研

究代表者の平山は、ミュンヘン大学のヴォルフハルト・ヘンクマン教授と直接コンタクトを取り、現代ドイツにおける自然美学研究の現状について意見交換を行なうとともに、今後の研究協力の在り方についても意見交換を行なった。3年間にわたる本課題研究の最終年度においては、当初の計画に従い、夏季に2日間にわたる合同研究会を行うとともに、2015年11月23日-24日の2日間にわたって「自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ」を、公開を原則に、自然美学、環境美学に関心を持つさまざまな研究者約20名の参加を得て一橋大学の国立キャンパスにて開催した。この国際ワークショップは、当課題研究の研究分担者でもある加藤泰史（一橋大学教授）が研究代表者を務める「尊厳概念のアクチュアリティ」（研究課題番号：25244001）との共催の形において実行され、海外から以下の3名の研究者を招聘して行われたものである。ヴォルフハルト・ヘンクマン（ミュンヘン大学名誉教授）、エファ・シユルマン（マクデブルク大学教授）、ジェーン・ネラー（コロラド大学教授）。

当初の研究計画において海外研究協力者として予定されていたゲルノート・ベーム氏（ダルムシュタット工科大学）の日本への招聘は実現しなかったが、当課題研究の連携研究者である阿部美由起が同氏と直接連絡を取ると同時に、ベーム自然美学についての優れた研究成果を第66回美学学会全国大会（2015年10月）にて『ゲルノート・ベームの自然美学の射程 「美しい自然が善い自然とは限らない」をめぐって』という題目でその研究成果を発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計14件）

高畑祐人、「エコフェミニズムの批判的変

換 自然美学的読み替えの試み 』、名古屋哲学研究会編『哲学と現代』、査読無、第 31 号、2016、78-97

平山敬二、「マルティン・ゼールの『自然美学』における美的なもの倫理的なもの シラーの美学思想を参照軸とする一考察 』、日本シェリング協会会誌『シェリング年報』、査読無、第 23 号、2015、39-50

阿部美由起、『ゲルノート・ベームの自然美学の射程 「美しい自然が善い自然とは限らない」をめぐって』、美学会誌『美学』、第 66 巻 2 号、2015、査読有、114

加藤泰史、『クヴァンテの「プラグマティズム 的人間学 (Pragmatische Anthropologie)」構想と生命医療倫理学の現在』、ミヒヤエル・クヴァンテ『人間の尊厳と人格の自律』法政大学出版局図書所収論文、査読無、単行本、2015、289-318

阿部美由起、『もはや美しくない自然 ベームの自然美学における「自然形成」を巡って 』、横浜美術大学 教育・研究紀要 論文篇、査読有、第 5 巻、2015、169-177

平山敬二、『環境美学と環境倫理 自然再生の問題を巡って 』、日本ヘーゲル学会誌『ヘーゲル哲学研究』、査読無、第 20 号、2014、59-71

加藤泰史、『現代ドイツの自然美学』、日本ヘーゲル学会誌『ヘーゲル哲学研究』、査読無、第 20 号、2014、83-96

小川真人、『ヘーゲルと自然美学』、日本ヘーゲル学会誌『ヘーゲル哲学研究』、査読無、第 20 号、2014、72-82

平山敬二、『シラー美学における遊戯の概念』、国際伝統芸術研究会誌『国際伝統芸術研究』、査読無、第 3 巻、2014、69-88

加藤泰史、『カントとスピノザ (主義)』、岩波書店『思想』、査読無、no.1080、2014、

138-168

加藤泰史、『カントとハイデッガー』、ハイデッガーフォーラム『Heidegger - Forum』、査読無、vol.8、2014、125-140

高畑祐人、『本質的自然資本の規範的説得力 環境経済学と環境倫理学の生産的な協働に向けての一試論 』、南山大学社会倫理学研究所『社会と倫理』、査読無、第 29 号、2014、7-19

平山敬二、『「善き生」に向けられた芸術表現の開拓 SEINO とボイスとの係わりについて 』、SEINO Exhibition - 鮮やかな幽体展、査読無、2014

平山敬二、『「美学」入門 カントの『判断力批判』を読んでみよう 』、東京工芸大学芸術学部基礎教育ブログ 2013 年度リレー連載、査読無、第 10 回、2014

〔学会発表〕(計 24 件)

阿部美由起、『ゲルノート・ベームの自然美学の射程 「美しい自然が善い自然とは限らない」をめぐって 』、第 66 回美学会全国大会、2015 年 10 月 10 日、早稲田大学戸山キャンパス(東京)

阿部美由起、『ゲルノート・ベームにおける「美しい自然」と「善い自然」』、第 5 回新規環境美学研究会、2015 年 8 月 30 日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

長澤麻子、『自然は美しいか? 美的な自然経験をめぐって 』、第 5 回新規環境美学研究会、2015 年 8 月 31 日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

平山敬二、『ゼールの『自然美学』とシラーの自然美論』、第 5 回新規環境美学研究会、2015 年 8 月 31 日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

高木駿、『美に関する快の感情の生成』、第 5 回新規環境美学研究会、2015 年 8 月 30 日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

Jane Kneller(ジェーン・ネラー)、「The Mirror of Humanity:Nature and Aesthetic Reflection」(「人間性の鏡：自然と情感的反省」、訳：高畑祐人)、自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ(招待講演)、2015年11月23日、一橋大学国立キャンパス佐野書院(東京)

Eva Schuermann(エファ・シュルマン)、「Natur als Substanz und als Organismus. Herder entfaltet die Naturphilosophie Spinozas」(「実体および有機体組織としての自然 ヘルダーによるスピノザ自然哲学の展開」、訳：長澤麻子)、自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ(招待講演)、2015年11月23日、一橋大学国立キャンパス佐野書院(東京)

Wolfhart Henckmann(ヴォルフハルト・ヘンクマン)、「Ueber die aesthetische Erfahrung der Natur」(「自然の美的経験について」、訳：鈴木賢子)、自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ、2015年11月24日、一橋大学国立キャンパス佐野書院(東京)

府川純一郎、「Ist es falsche Projektion oder richtige Solidaritaet? - Ueber die Vermenschlichung der Natur in Adornos Aesthetik - 」、自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ、2015年11月23日、一橋大学国立キャンパス佐野書院(東京)

高木駿、「The Problem of Kant's Self-Contradiction in Concrete Judgments of Taste」、自然美の哲学をめぐる国際ワークショップ、2015年11月24日、一橋大学国立キャンパス佐野書院(東京)

平山敬二、「和辻哲郎の「風土論」再考」、第4回新規環境美学研究会、2015年2月21日、東京工芸大学中野キャンパス(東

京)

長澤麻子、「美と Aura 現代社会における Aura の可能性について」、第4回新規環境美学研究会、2015年2月22日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

阿部美由起、「ベームによるゼールの『自然美学』解釈」、第4回新規環境美学研究会、2015年2月21日、東京工芸大学中野キャンパス、(東京)

平山敬二、「マルティン・ゼールの『自然美学』における美的なものとの倫理的なもの」、日本シェリング協会、2014年7月5日、立命館大学衣笠キャンパス(京都)

平山敬二、「芸術と風土 「希望」としての脱近代」、平成26年度あつぎ協働大学(招待講演)、2014年5月31日、東京工芸大学厚木キャンパス(神奈川)

加藤泰史、「自然美学の諸問題」、第3回新規環境美学研究会、2014年8月2日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

長澤麻子、「『美的環境』とはなにか?

W.ベンヤミンのアウラ概念を手がかりに」、第3回新規環境美学研究会、2014年8月3日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

長澤麻子、「ベンヤミンの「歴史概念について(歴史哲学テーゼ)」を読む」、立命館大学土曜講座(招待講演)、2014年10月18日、立命館大学衣笠キャンパス(京都)

阿部美由起、「ベームの「雰囲気」における「美しさ」ゼールの美の概念との比較において」、第3回新規環境美学研究会、2014年8月2日、東京工芸大学中野キャンパス(東京)

高畑祐人(村上哲夫、粟屋かよ子、伊藤章夫、河口尚子、鬼頭孝佳とのセッション)、「環境倫理としてのエコフェミニズムの可能性」、日本科学者会議第20回総合学術研究集会分科会 [D-3環境とジェンダ

一]、2014年9月13日、西南学院大学(福岡)

- ⑳ 平山敬二、「和辻哲郎の『風土』とダゴベルト・フライの『比較芸術学』」、上智大学哲学会(招待講演)、2013年6月30日、上智大学四谷キャンパス12号館1階102教室(東京)
- ㉑ 平山敬二、「環境美学と環境倫理学 自然再生の問題を巡って」、日本ヘーゲル学会、2013年12月21日、東洋工芸大学中野キャンパス芸術情報館3階大会議室(東京)
- ㉒ 加藤泰史、「現代ドイツの自然美学 マルティン・ゼールの『自然の美学』」、日本ヘーゲル学会、2013年12月21日、東京工芸大学中野キャンパス芸術情報館3階大会議室(東京)
- ㉓ 高畑祐人、「クレプス自然倫理学構想における「情感的観照」論の位置づけ」、第1回新規環境美学研究会、2013年8月4日、東京工芸大学中野キャンパス芸術情報館2階第1セミナー室(東京)

〔図書〕(計5件)

アクセル・ホネット著/出口剛・日暮雅夫・宮本真也・長澤麻子共訳、法政大学出版局(東京)『理性の病理』、2016年、印刷中

藤田正勝編・加藤泰史、法政大学出版局、『思想間の対話』(第12章和辻哲郎とトランスカルチュラルリズムの問題)、2015年、370(214-239)

長澤邦彦・入江幸雄編・加藤泰史、晃洋書房、『フィヒテ知識学の全容』(第部知識学の応用 第5章 学者論)、2014年、337(243-257)

岡林洋(編著)・平山敬二、晃洋書房、『カルチャー・ミックス 文化交換の美学序説』、2014年、216(107-121)

加藤泰史(監訳)・平山敬二(監訳)、阿部

美由起、小川真人、菅原潤、高畑祐人、長澤麻子、宮島光志(共訳)、法政大学出版局、2013年、500(加藤 415-435、平山 263-326、阿部 149-207、小川 208-262、長澤 97-148 及び 393-414、高畑 327-392)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平山 敬二 (HIRAYAMA KEIJI)

東京工芸大学・芸術学部・教授

研究者番号：50189867

(2) 研究分担者

加藤 泰史 (KATO YASUSHI)

一橋大学・社会(科)学研究科・教授

研究者番号：90183780

長澤 麻子 (NAGASAWA ASAKO)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：30611628

(3) 連携研究者

阿部 美由起 (ABE MIYUKI)

玉川大学・芸術学部・非常勤講師

研究者番号：70534725

(4) 研究協力者

高畑 祐人 (TAKAHATA YUTO)

南山大学・外国語学部・非常勤講師